

造山古墳の被葬者を探る（上）

「吉備海部の娘・黒日売命か」

NPO 法人福岡歴史研究会副理事長 石合 六郎

<はじめに>

一昨年の季刊古代史ネット（第5号）で筆者は吉備の巨大古墳の被葬者を推定した。その中で全国4番目の規模を誇る「造山古墳」について、「黒日売命説」を打ち出した。

安本美典氏も「巨大古墳の被葬者は誰か」（1989年刊）の中で全国の100メートルを大きく超える巨大古墳の主がわからないはずはないとの趣旨をのべられている。まったくその通りである。同氏は前掲の著書で多くの巨大古墳の主を解明している。その吉備のところで、作山古墳と造山古墳について「『古事記』『日本書紀』の伝える応神天皇や仁徳天皇のロマンスと、何らかの関係があるだろう」（同書 p 389）と記されている。その全文を読むと、2つの古墳が「兄媛命」と「黒日売命」を想定していることは明らかである。

安本氏が開発した古墳の築造年代を統計学的に推定する手法と伝承の両面から今一度造山古墳の被葬者を探ってみた。



メモ 白抜き丸囲い数字は遠藤堅三氏の著書「古代のロマンス 黒媛伝説」掲載箇所、二重丸が備中誌の伝承地・足守の深茂。

◎黒日売命はどんな女性か

古事記の仁徳記に黒日売命のことが書いてある。その要旨は、嫉妬深い皇后が、なんとなく田舎臭い吉備出身の乙女を歩いて帰らせるといふ意地悪をして、かえって夫の天皇が乙女をいとおしく思って、淡路島を見たいと偽って、吉備まで追いかけていき、逢瀬を楽しむという、天皇らしからぬ、ほほえましい物語だ。



黒日売命が仁徳天皇の大和への帰還を惜しんで歌った「やまとへに 西風ふきあげて 雲離れ 退きおりとも 我忘れめや」の歌碑=伝説地の一つである総社市のJR駅東口

吉備の人々にとって、愛らしい黒日売命はどこに住んでいたのかと、関心を持った人は多かったのだろう。前ページで紹介したの遠藤堅三氏もそのおひとりだったのだろう。

その7つの伝説地のうち6伝説地は遠藤氏が言うようにいずれも、仁徳天皇の御歌「山方に 蒔ける^{あおな}菘菜も 吉備人と 共にし採^つめば 楽しくもあるか」(山の畑に蒔いた青菜も吉備の人と一緒に摘むと楽しいことだな)の「山方」(「山形」「片山」も含む)の地名にちなんだもの。玉島の黒島地区は、「沖方には^{おぶね}小舟がつららく 黒^{くろざや}鞆の真幸子^{まきづこ} 吾妹^{わがも} 国へ下らす」(沖の方には小船が連らなっている あれは愛しいあの子が国へ帰るのだ)の歌の「黒鞆」を、本居宣長の「古事記伝」に従って、黒崎と読み替え、玉島黒崎を黒日売の出身地としたという(「古代ロマンス黒媛」p15)。

◎なぜか存在に否定的

黒日売については、「日本書紀の応神天皇記をもとにした創作で、仁徳帝は吉備に来なかった」とする否定的な意見が多い。なぜだろうか。

足守地区の郷土史家として、「足守の歴史」などの著書がある池田克己氏は「足守では仁徳天皇のことは備中誌の作者の一存であり…」と(「足守の史跡、文化財」p22)と全く問題にしていない。それに対して応神天皇のことは事実として丁寧に書き込まれているだけに余計に不思議である。おそらく、記紀は信用すべきではない、ましてや片一方にし書かれていない逸話はのちの造作に違いない。兄媛の話焼き直して黒日売の話にした

との一部学者の考え方に影響を受けたのであろう。

応神天皇のお妃・兄媛については、吉備での黒日売のようなエピソードはなく対照的だ。むしろ、政治的な国別けの話が中心となっている。

◎黒日売も兄媛も実在

いうまでもないが、15代応神天皇は神功皇后の子供で、応神天皇の子が16代仁徳天皇である。二人の天皇は5世紀の前半に活躍した。応神天皇は西暦410年ごろ～420年に、仁徳天皇は425年ごろから438年ごろまで在位した。これは安本美典氏の「古代天皇在位10年説」（4ページ）にもとづき推定したものだ。神功皇后は架空の人物とする説もあるが、それは間違いである。

遠藤氏が紹介した7伝説地は、地名に基づく付会といわざるを得ないが、備中誌の岡山市北区足守の「深茂の伝承」は、兄媛命と黒日売命の記述が極めて具体的で、筆者はかなりの確率で事実だと思う。そこでその部分をまとめてみた。

【「兄媛」に関する部分】

「葉田八幡大神宮は日本書紀に載るのだから大きなお宮である。応神帝はカガリ山というところへ船で着いた。葉田葦守の宮での供応をお受けになった。これまで言われていた現在の葦守八幡宮ではなく、大神谷の御友別の邸宅であったはずだ。吉備武彦命の館もこの地で、御友別命まで二代の間の館の場所だ。応神天皇の行宮の跡なので大神谷の名もついた。兄媛もこの館に住んでいた。地名の深茂は婦ヶ面からきている。中彦命の時、応神天皇を山方の地に社を造って祀った。兄媛の廟を婦ヶ面に造らした。地元人は大神谷のことを大釜谷と^{おうちやう}いつていた。応后神社はこの深茂の谷に鎮坐し吉備兄媛を^{きびのえひめ}祭りしている。吉備の国分けで兄媛が服部縣を賜ったが、服部郷の長良村にいた仲彦の子孫の王部の臣等が、自分の領地がある足守にお墓を移して祀ったのかもしれない。慶長時代の畑別帳には『王后』の字を使っていたが、貞享二年には『応広』か『応光』の字に新ためられてい



岡山市北区足守の深茂の谷。この谷の最奥部に応光明神の石碑がある。黒日売と吉備海部は谷入口のカガリ山に住んでいた。仁徳天皇の行宮もその地とされている

る。」

【「黒日売」に関する部分】

「仁徳天皇がお妃の黒日売を恋い慕って、吉備の山方の地にこられたことが古事記に書かれている。その地は今の足守地区の深茂というところだ。天皇は小豆嶋から船で来られた。今の足守の地名の起源となった芦森の湊ところに着かせた。ここを御居谷^{みいだに}という。今は仁井谷（三井谷）とよび、その上の山を移舟ヶ嶽という。

お妃となられた黒比売命は海部直の娘で、ここに住んでいた。今も地名が残っている「かがり山」に近いところに「車ヶ嶽」という場所がある。その西の地に吉備海部の館があった。黒日売もそこに住んでいて、のちに婦元^{ふもと}ともいい、妹^{いも}ともいった。仁徳天皇はそこを行宮とした。そのため御車が通ったので車ヶ嶽という地名が起こった。これらはずべて、黒日売命がもとでついた地名だ。

有名な菘菜を摘んで天皇をもなしたのも深茂の谷のどこかだろう。

小早川秀雄が言うには『海部直がこのあたりにいたというなら、その名前からして、この辺は海だったに違いない。だから潮が打寄る地なので、黒日売と一緒に野草を摘んだ「山方」をこの辺りと考える説は再考すべきだ』といている。」

さらにこれに関する小字が今も残っている。次の通りだ。

①篝山②小屋方ヶ谷③芦ノ森④井元⑤応光⑥大釜谷⑦カガリ山⑧鯉ノ嶮⑨三井谷

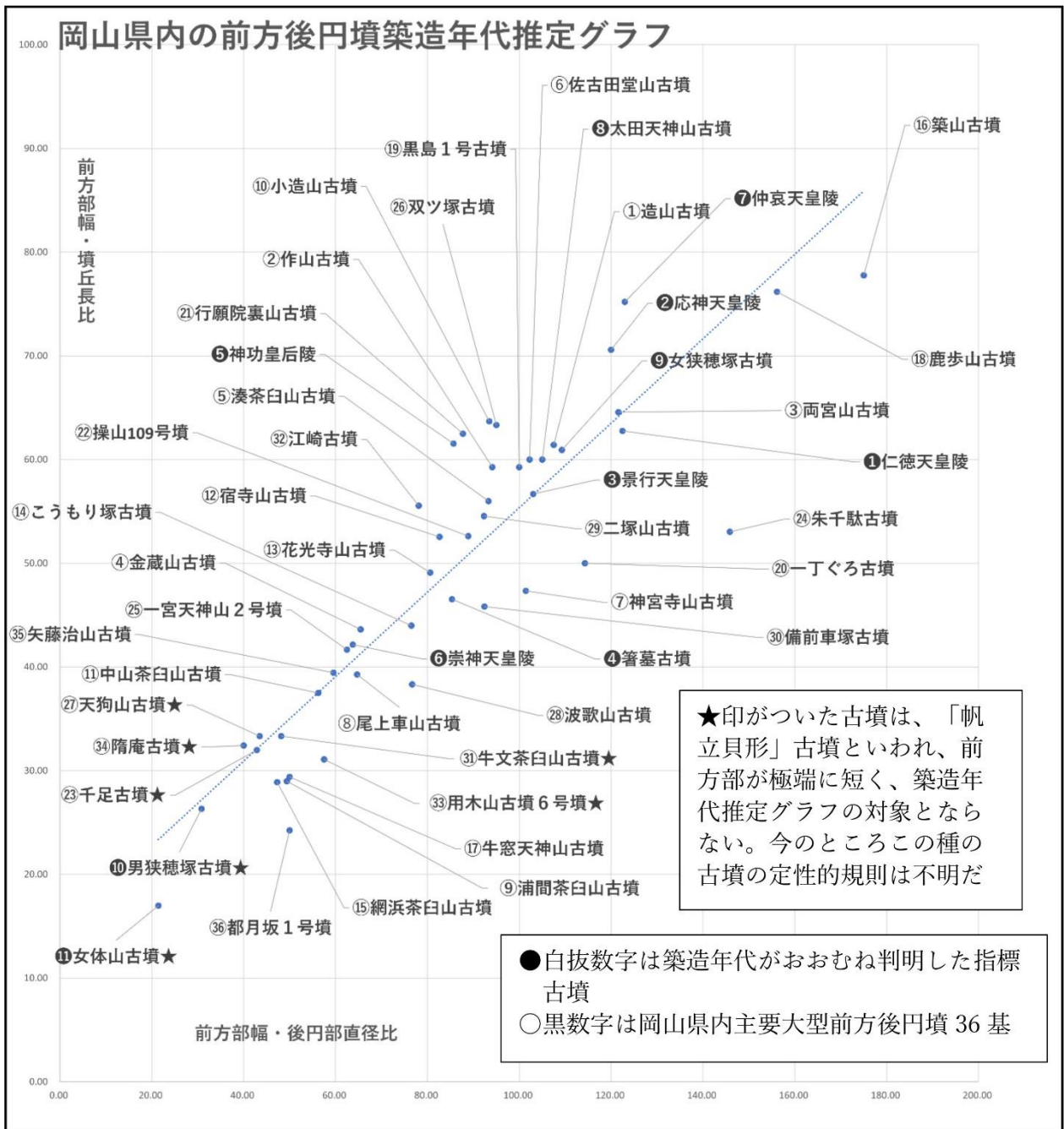
◎吉備津神社縁起や素尊伝承も傍証

吉備津神社の縁起の一つに「仁徳天皇が吉備海部直の娘黒媛を慕って難波から吉備の国に行幸した時、大吉備津彦命の功をよみして社殿を創建して、これを祀ったとも伝えている」（藤井駿著「吉備津神社」p 26）というのがある。さらに「素戔鳴尊の剣」が吉備から大和に移ったのは仁徳天皇の時と石上神宮の記録にも残っている。仁徳天皇が吉備にきたのがきっかけとっていいだろう。応神天皇はもとより、仁徳天皇が吉備にきていないという説は成り立たない。

< 2 > 吉備の巨大古墳の被葬者

造山古墳の被葬者を特定するための古墳年代推定グラフを改めて作成した。吉備の主要古墳の築造年代や被葬者を確定しておく必要があるためだ。46基の古墳をひとつの分布図（グラフ）にまとめてみた。もちろん指標となる大和のものや、造山古墳と相似形の宮崎と群馬のもの、その倍塚（帆立貝形）も含めた。やや複雑だが、吉備の古墳を概観できそうである。

◎年代と分布図の関係



この表を見ていただくと、「分布図の見方と年代」に示したように古い古墳から新しい古墳へ近似曲線に沿って並ぶ。ただ、すべてが正確にこの線上に沿ってきれいに並ぶわけではない。例えば、応神天皇陵と仁徳天皇陵を比べると、16代仁徳天皇陵は父親の15代応神天皇陵より古くなっている。これはいろいろな事情やその後の自然現象や人工的な変形の影響で変わってくる。

したがって、25～50年ぐらいの幅で考え、4世紀前半とか後半という形で理解する必要がある。

◎古墳の築造年代

築造年代は分布図によって相対的に把握できる。それに天皇の活躍年代（在位の時期）がわかれば決まる。そこで吉備の古墳について考えてみよう。これはもちろん、筆者の仮説に基づくものだ。仮説を立てることは、事実を得るための重要な一歩なのだ。

〔1〕大和朝廷の吉備支配=4世紀

西暦350年ごろに在位していた崇神天皇に近い位置に【大吉備津彦命】（中山茶臼山古墳）と弟の【稚武吉備津彦命】（尾上車山古墳）が位置する。吉備津彦命のお后（百田弓矢姫か、高田姫のどちらか）と考える一宮天神山古墳は崇神天皇とまったくといってよいほど同じ位置にプロットされている。

〔2〕景行天皇の時代=4世紀末

さきに紹介した【御友別命】の佐古田堂山古墳は、応神天皇陵や仁徳天皇陵のグループに比較的近い位置にある。その御友別命の父親は日本武尊の東国征討時の副将【吉備武彦命】とされる。その墓は岡山市湯迫の備前車塚古墳と推定している。その佐古田堂山古墳より一世代（18年前後）古い位置に備前車塚古墳がプロットされている。さらに、その父親である【御鋸耳建日子命】の金蔵山古墳が備前車塚古墳と後に備前国府のあった平野を挟んで、南北数キロの間（操山山塊=金蔵山、龍ノ口山塊=備前車塚）で向かい合っている。プロットの位置関係もほぼ一世代程度のところにある。金蔵山古墳は全長150メートルで地方豪族では最大クラス、しかも、5世紀前方後円墳の特色であるくびれ部につくられる「造りだし（祭事を執り行い、捧げものを置く場所）」が古墳本体から離れた状態の「島状造りだし」が確認されている。すなわち4世紀古墳（吉備津彦の時代）と5世紀古墳（御友別の時代）をつなぐ存在だ。金蔵山古墳を御鋸耳建日子命（稚武吉備津彦

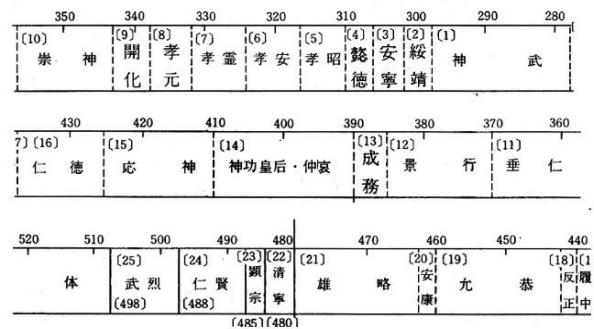
コラム 分布図の見方と年代

この分布図は安本美典氏が、考案したもので同氏の「巨大古墳の被葬者は誰か」の中では前方後円（方）古墳の築造時期を推定する手法として、グラフの横軸に「前方部幅/後円部径×100」を、縦軸に「前方部幅/墳丘全長×100」をとり、図に落とす分布グラフを作成している。

上のグラフでは吉備の主要古墳の推定築造年代が古い順に左下から右上へ近似曲線に沿い並んでいる。いくつかの例外を除いて筆者が想定する被葬者の活躍年代とほぼ合致している。吉備津彦命の吉備入り時の人物は崇神天皇陵に、吉備分国時の人物は応神天皇陵に近い形の墳墓を持つといえる。

被葬者の比定は安本美典氏らの研究を参照したが、いずれも筆者の責任で推定した。「？」は疑問点もあり、今後の検討が必要。時代を特定しやすくするため崇神、景行、神功、応神、仁徳らの天皇のデータを入れた。活用データは原則として日本古墳大辞典(大塚初重氏ら編、平成元年刊)による。同書にデータがないものは、それぞれ、データ元や推定根拠を表示した。

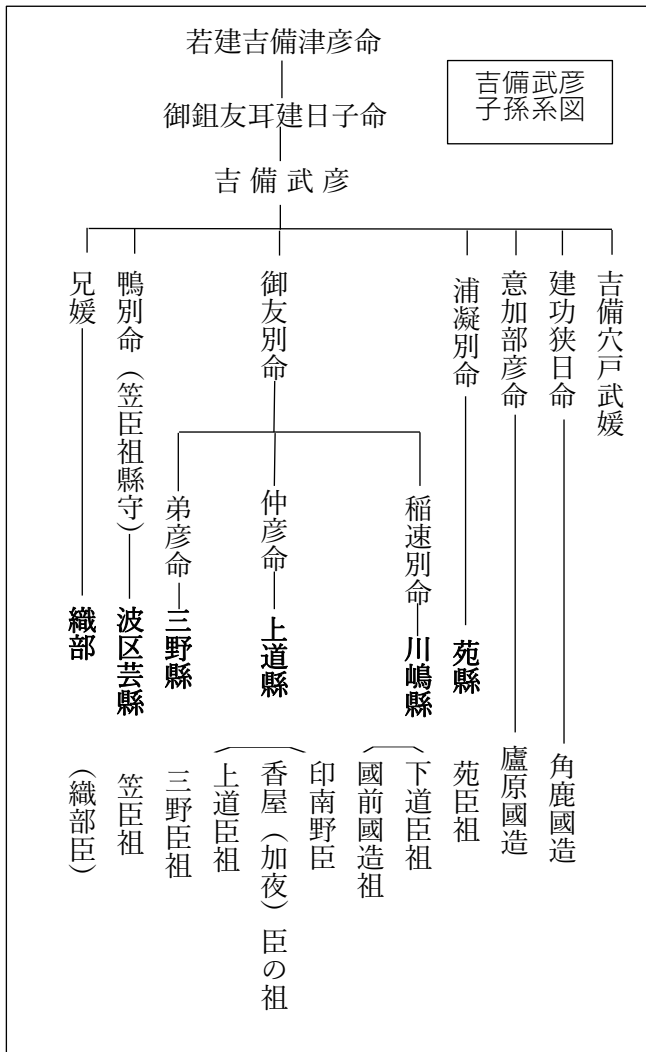
下図は古代天皇在位10年説に基づく天皇在位推定年表だ。これに基づけば、どの天皇がいつごろ活躍したかがわかる。



の子供) とする仮説は年代的にも矛盾はない。

〔3〕古墳が示す「国別け」 = 5世紀前半

前項で述べたように応神天皇が吉備に来訪したのは5世紀の前半、御友別命の兄弟や子供たち6人に別け与えた(お墨付きの意味が強い)となっている。古墳もほぼその通りに存在する。



【御友別命】は当時の吉備の当主であつたらう。吉備の中樞部分の大半を父の吉備武彦から受け継いでいたはずだ。6つに国別し、備中と備前を4人の子供達が受け継いだ(左の系図参照)。

その墓は岡山市北区高松地区の佐古田堂山古墳と考えている。4世紀末から5世紀の初めのグループに入り、兄弟とする兄媛の作山古墳や神功皇后とも近い位置にプロットされる。その長男【稲速別命】は下道郡(高梁川以西の総社市と旧真備町一部)を受け継ぎ、その領域内にある一丁ぐろ古墳(全長70メートルの前方後方墳)を墓と推定する。平成23年度から実施された確認調査によって、大型の前方後方墳と判明、岡山県南部では最大の前方後方墳として話題になった。

次男の【仲彦】は備中の中樞部の加夜郡(後の吉備郡等)と備前の上道郡(岡山市の東部=上道郡等)を支配地域とした。筆者は現在のところその有力な候補古墳を岡山市北区新庄と総社市の市境にある小造山古墳(全長135メートル、吉備で8位の大きさ)と考えている。グラフを見ると、笠岡市の双塚古墳(鴨別命=叔父)と並ぶ、周囲には父親(御友別命)の佐古田堂山古墳、叔母(兄媛)の作山古墳がある。小造山古墳は、「埋葬施設や副葬品の有無については知られていないが、前方部前面部幅が後円部径に匹敵するほど開いていることや、採集された埴輪の特徴からも中期古墳と考えられる。ただし、前方部長が墳長の半分強しかないこと、丘陵上に立地すること、円筒埴輪が小さ

いことなど中期の大形前方後円墳にしては特異な点がある」(葛原克人、古瀬清秀著「吉備の古墳 下」p38～39)と指摘されている。

この古墳の東南300メートルには造山古墳があり、小造山古墳の周辺には一辺44メートルの方墳(折敷山古墳)、帆立貝形前方後円墳(夫婦塚古墳)を従えている。加夜、上道を率いる当主の墓として遜色はないであろう。

〔4〕弟彦命は神宮寺山、鴨別命は双つ塚

三男の【弟彦^{おとひこ}】は三野郡(岡山市の旭川以西と東側の一部)をもらっている。候補となる岡山市北区中井の神宮寺山古墳は墳形が小学校校庭の拡張や墓地化で大きく崩されているが、それを補正して現在の位置にプロットされている。地元で伝承もあり、この古墳の被葬者は弟彦といえようか。

御友別命の兄の【浦凝別命】は苑縣(倉敷市真備の園のあたり)を受け継ぐがグラフ上では対象古墳を絞りにくい。ただ、浦凝別命の領地は^{そのあがた}苑縣で、その名前を受け継ぐ「園」は小学校名では残っているが地区名はない。古代の苑縣の範囲はわからないが、真備地区での5世紀古墳を探してみた。すると天狗山古墳(全長60メートル、帆立貝形古墳)が最も大きい、次いで箭田大塚古墳が全長約46メートルの円墳に造りだしが付属している。その他は35メートルの勝負砂子古墳(前方後円墳)、34メートルの矢形ぐる古墳(同)、30メートルの二万大塚古墳(同)などがある。

これを見る限り、浦凝別命の墓候補は天狗山古墳だろう。グラフ上でのプロット位置は帆立貝形古墳のため、左下に集中した同形古墳のグループに入っている。戦前に盗掘にあっており、正確な情報はないが国立博物館に変形獣鏡・桂甲・刀剣・鉄鏃・金銅貼りの剣菱形杏葉・f字鏡板付轡を含む馬具が出土物として納められている。これだけでは被葬者として断定できないが可能性のある古墳としておきたい。

同弟の【鴨別命】は波区芸縣(笠岡市と井原市の一部など)で、笠岡市走出にある長福寺裏山古墳群の盟主的存在の双つ塚古墳(全長60メートル)がふさわしい。グラフのプロット位置も整合性が取れている。高梁川以西の岡山県か最大の古墳である。長福寺裏山古墳群は後の笠臣の奥津城と見てよい。

< 3 > 兄媛は作山、黒日売は造山

いよいよ造山古墳の被葬者を黒日売説を検討する。応神天皇の妃(おきさきでも皇后とそ

前方後円墳の被葬者推定表

古墳名	想定被葬者	墳丘全長	所在地
①造山古墳	黒日売命	350.00	岡山市北区
②作山古墳	兄媛命	270.00	総社市
③両宮山古墳	不明	192.00	赤磐市
④金蔵山古墳	御鋳友耳建日子命	165.00	岡山市中区
⑤湊茶臼山古墳	不明	150.00	岡山市中区
⑥佐古田堂山古墳	御友別命	150.00	岡山市北区
⑦神宮寺山古墳	弟彦命	150.00	岡山市北区
⑧尾上車山古墳	稚武吉備津彦命	140.00	岡山市北区
⑨浦間茶臼山古墳	不明	138.00	岡山市東区
⑩小造山古墳	仲彦命	135.00	岡山市北区
⑪中山茶臼山古墳	大吉備津彦命	120.00	岡山市北区
⑫宿寺山古墳	不明	118.00	総社市
⑬花光寺山古墳	不明	110.00	瀬戸内市
⑭こうもり塚古墳	不明	100.00	総社市
⑮網浜茶臼山古墳	不明	90.00	岡山市中区
⑯築山古墳	吉備海部一族か	90.00	瀬戸内市
⑰牛窓天神山古墳	吉備海部一族か	85.00	瀬戸内市
⑱鹿歩山古墳	吉備海部一族か	84.00	瀬戸内市
⑲黒島1号古墳	吉備海部一族か	81.00	瀬戸内市
⑳一丁ぐろ古墳	稲速別命	80.00	総社市
㉑行願院裏山古墳	不明	80.00	倉敷市
㉒操山109号墳	不明	76.00	岡山市中区
㉓千足古墳★	吉備海部一族か	75.00	岡山市北区
㉔朱千駄古墳	不明	66.00	瀬戸内市
㉕一宮天神山2号墳	百田弓矢媛or高田姫	60.00	岡山市北区
㉖双ツ塚古墳	鴨別命	60.00	笠岡市
㉗天狗山古墳★	浦凝別命	60.00	倉敷市
㉘波歌山古墳	不明	60.00	瀬戸内市
㉙二塚山古墳	不明	55.00	瀬戸内市
㉚備前車塚古墳	吉備武彦命	48.00	岡山市中区
㉛牛文茶臼山古墳★	不明	48.00	瀬戸内市
㉜江崎古墳	不明	45.00	総社市
㉝用木山古墳6号墳★	不明	37.00	瀬戸内市
㉞隋庵古墳★	不明	37.00	総社市
㉟矢藤治山古墳	吉備津彦命妃か	35.50	岡山市北区
㊱都月坂1号墳	不明	33.00	岡山市北区
◎丸数字は墳長順		<注>単位はメートル	

の他で、お后とお妃を漢字では区別している)で吉備武彦の娘の【兄媛】は織部(服部地区=総社市の一部)を領有し(御名代や江戸時代の化粧料的な意味合いか)、墓は岡山県下第二位の全長282メートルを誇る作山古墳(全国10位の前方後円墳)と筆者は考える。安本美典氏も「巨大古墳の被葬者は誰か」の中で、妃が大古墳の被葬者となれるかどうかについて「皇后とされている女性と妃とされている女性との身分差が、あまり大きくなかったとすれば、仲津媛陵古墳(応神天皇皇后=290メートル)の大きさに近い墳丘長二七〇メートルの作山古墳が、兄媛の墓である可能性は多分にあるといえよう。」(同書p376)と述べる。また「兄媛の生んだ応神天皇の皇子が、吉備の国にいたとすれば、大前方後円墳が築かれる可能性はあるであろう。」「(仲彦は)御友別の子である。『先代旧事本紀』によれば、仲彦は、応神天

皇の時代に、加夜の国造に任ぜられたという。仲彦は、兄媛の兄の御友別の子であるから、仲彦は、(叔母) 兄媛の生んだ皇子のいところになる。」(同 p 377) と作山古墳が兄媛以外の可能性を述べた後、さらに「私は、築造時期が造山古墳よりやや早いとみられる作山古墳は、兄媛または御友別の墓である可能性が比較的高いように思うが、造山古墳については、もうすこし別の面から考えてみる必要がある。」と慎重な姿勢を示す。

◎離れた地に相似形古墳

宮崎の女狭穂塚古墳と男狭穂塚古墳が誰なのかをも検討され、造山古墳(全長350メートル)と群馬の太田天神山古墳(同210メートル)、宮崎の女狭穂塚古墳(同174メートル)の3つが完全に相似形であることを述べている。その後女狭穂塚古墳と男狭穂塚を日向の国造家に連なる一族で、仁徳天皇のお妃・髪長媛とその父・牛諸とするとともに、太田天神山古墳を神功皇后や応神天皇の時代に朝鮮半島でも活躍した関東の大豪族・荒田別と結論付けている。以上の検討のうえで、造山古墳について次のように述べている。

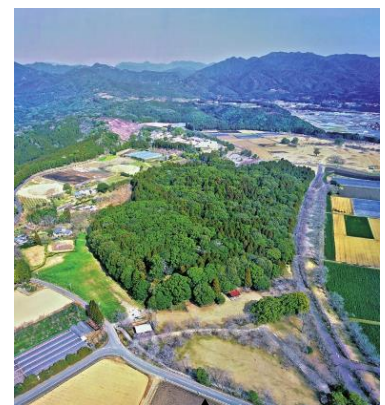
「仁徳天皇と黒日売との話は、『日本書紀』の伝える応神天皇と兄媛との話に、かなり似ている。五世紀ごろ、応神天皇や仁徳天皇と関係をもつ女性たちが岡山にいた。応神天皇や仁徳天皇の時代は、畿内で、大前方後円墳のきずかれた時代である。ほぼ同じ時代に、岡山で大前方後円墳がきずかれるのは、やはり、『古事記』『日本書紀』の伝える応神天皇や仁



google マップによる造山古墳群の俯瞰図。中央右寄りに造山古墳がありその左に千足古墳が並ぶ。その間に榊山古墳や2号墳がある。今は消えた古墳もあるようだ。



二つ並ぶ太田天神山古墳(左)と女体山古墳



西都原古墳群の女狭穂塚古墳(手前)と男狭穂塚古墳。墳長は女狭穂塚の方が長い、後円部径は男狭穂塚の方が長い。周溝や樹木の状態もあって男狭穂塚の方が大きく見える

徳天皇のロマンスと、なんらかの関係があるのであろう。」(同 p 359)

先に作山古墳について、兄媛と応神天皇との皇子や仲彦を候補に挙げ、お妃の可能性をやや低く見る見解を示しながら、お妃を候補にするならと条件を付け「兄媛か」と断定した。そして、ここで「作山は兄媛、造山は黒日売」の可能性をにじましている。

◎慎重姿勢の中に本音も

筆者はこの問題について安本氏と電話で話し合ったことがある。

筆者「先生は造山古墳について、御友別命かその一族（当時筆者は吉備海部は彦狭嶋子孫説をとっており一族と理解していた）とされていますが、お気持ちは黒日売ですよ」

安本「それは、やはり自信がなかったからです」

筆者「御友別命にはふさわしい古墳として佐古田堂山古墳があります」

安本「それは存じませんでした」

筆者「この古墳は全長150メートルもあるのに、あまり取り上げられていません。古墳ファンの間だけで有名です」

安本「(奈良県と大阪府除くと)豪族の墓で100メートルを大きく超えることは限られています。(吉備でも3番目の)200メートルを超す両宮山古墳(全長206メートル)を田狭の墓とするのは慎重にしないとイケない。雄略天皇のお妃・稚媛も候補で残しておくべきです」

以上で電話を終えたが、筆者はこのシリーズで「状況証拠的には両宮山は田狭の墓だろう」と述べている。それに助言してくれたようだ。まずは撤回しておこう。両宮山古墳は206メートル、荒田別が210メートル、例外がないわけではない。この古墳は主体も埴輪もない、工事途中で放棄されているので田狭が寿陵として作ったともみられるが、荒田別ほどの功績はない。ましてや、任那の国司に追いやられ、新羅と内通してからは、罪人扱いである。一方、稚媛も星川の皇子を皇位に就けようとして非業の死を遂げている。完成されていないのは符合する。

妃が巨大古墳の被葬者になることは、日本の古代では不思議ではなかったのだろうか。

< 4 > カギ握る千足古墳

安本氏のいう3つの相似形古墳(造山、太田天神山、女狭穂塚)にもう一つ共通点があった。それはそれぞれ倍塚を持ち、その古墳が比較的大きいことだ。造山古墳には千足古墳、太田天神山古墳には女体山古墳、女狭穂塚古墳には男狭穂塚古墳がある。

中でも男狭穂塚古墳は帆立貝形陪塚といわれながら全長154.6メートルで女狭穂塚

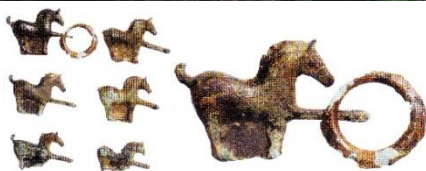
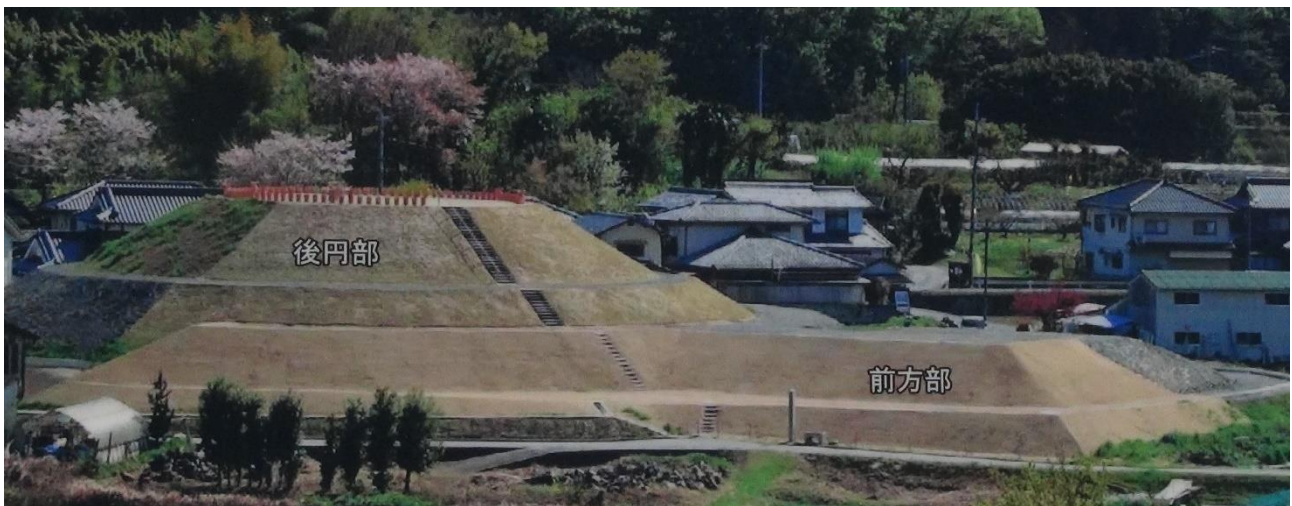
古墳の174メートルより短いながら、後円部径は女狭穂塚の96.1メートルに対し、男狭穂塚は132メートルと大きい。太田天神山古墳の陪塚の女体山古墳は同106メートル。盟主の太田天神山古墳が「男体山」と呼ばれることから、この名があるといわれる。名前からお后かと思ひ浮かべてしまうが、そうとも限らないかもしれない。男狭穂塚古墳の例で河村哲夫氏は「女狭穂塚の被葬者の父親を諸牛と見るなら、保護者の立場だろう。（牛諸は）正式の前方後円墳が作れない身分なので、大きさだけは盟主の墓に近い大きさにしたのでは」との見解を示されていた。

筆者も同感である。女体山古墳も“かかあ天下”（？）の御后か、または東北の大豪族・荒田別も頭が上らない家族や家臣がいて、その誰かの墓なのか。

吉備の造山古墳の陪塚・千足古墳は、吉備では唯一の本格的装飾古墳だ。内部の遺体安置部分と石室を区切る「石障」の文様である直弧紋が水に浸かったままになり、模様が剥離しかかったため、2011年11月に取り出し、保護処置を施し岡山市埋蔵文化財センターで、保存展示されている。

◎千足古墳の被葬者がわかった

3つの相似型古墳ではいくつかの共通点があることがわかってきた。このことを前提にすれば、造山古墳群のナンバー2の位置にある千足古墳の被葬者は、造山古墳の被葬者の



榊山古墳と千足古墳から出土した馬形帯鉤。朝鮮半島製とみられ、国内ではまれ。両古墳から出土だが、入り交り、具体的には不明。海部らしい出土品といえる（宮内庁書陵部所蔵）



築造当時の姿に復元を目指しての工事が完了した直後の千足古墳＝同古墳での屋外展示パネルから。左は復元された埴輪

保護者的立場にある人物だろう。

では千足古墳の被葬者は誰なのか？

同古墳群では第1号古墳の榊山古墳と第5号の千足古

墳からは国内では珍しい馬形帯鉤うまがたたいこうが6つも出土している。国内では40例あるが出土地がはっきりしているのは、長野県の1件を除いて、両古墳からだけだが、発見が正式発掘でないため、2つの古墳出土物が混じり合い、それぞれどちらからかの出土か不明とされている。馬形帯鉤は朝鮮半島で墓から見つかることが多く、この2古墳の被葬者が朝鮮半島とかかわりがあるためだ。海部はまさに海を駆け回る。日本書記によれば、これまで述べてきたように吉備海部直赤尾（吉備海部直の子孫）は田狭の事件で、吉備海部直羽嶋（同）は百済王に仕え、百済の官僚になっていた日羅を呼び返すため2度も朝鮮半島に赴いていた。

それだけでなく造山古墳前方部に置かれている石棺が熊本県産の凝灰岩で作られていることなどから、吉備と肥後のかかわりも注目される。また、昭和60年に宇土市で千足古墳とそっくりな石室を持ち、石障もほとんど同じ直弧紋が刻まれているヤンボン塚古墳が発見されている。これらの古墳群は、海部ならでの特色を備えており、千足古墳に吉備海部直が葬られていると推測することは不自然ではない。

古事記には「黒日売命の父親」を吉備海部直と記している。やはり千足古墳（帆立貝形）の被葬者が吉備海部直なのだ。そうなら造山古墳の被葬者は黒日売命しかいないだろう。

◎吉備氏と海部は同族か、別族か

吉備海部直と吉備氏は同族との思い込みもあって、吉備の古代史シリーズ3回目で、「吉備海部は彦狭嶋（孝靈天皇皇子）の後裔」と引用してしまった。

この説は「古事記」「新撰姓氏録」にも掲載されよく流布されている。一概に誤りといえないが、今回、「先代旧事本紀現代語訳」（安本美典監修、志村裕子訳）の「国造本紀」を読み直してみると、「大伯おおくの国造 軽嶋豊明朝（応神朝）の御代、神祝かむはふりの命みこと（神魂かんむすびの命みこと）の七世の孫、佐紀足尼さきすくねを国造に定められた（大伯国は備前国久邑郡、吉井川東側の岡山県備前市・瀬戸内市・岡山市の一部）」とある。

その注95には「大伯の国造『齐明紀』七年（六六二）、筑紫への下向の途中で、大海人皇子（後の天武天皇）の妃の大田の皇女が「大伯おおくの海」に着いて大伯皇女を生んだことがある。国造氏の吉備海氏が大伯皇女の養育氏族とされる。本書では大伯の国造は、吉備一族とは出自を異にする。瀬戸内海の海上交通の要衝に位置し、水軍を率いて相対的自立性を保っていた氏族とみられる。『仁徳記』で仁徳天皇の寵愛を受けた黒日売は吉備海部の一族である。備前市に新庄天神山古墳、長船町に花光寺山古墳がある。安仁神社は備前国の一宮で神武天皇の兄の五瀬の命の由緒地。」という。

古代史解明のパイロット的役割を果たしてきた「先代旧事本紀の国造本紀」を無視して

はならない。必ず一定の真実を語っている。あっさり彦狭嶋説を捨てるのか？

もう少し、足守での吉備の海部の動きを振り返ってみると、稚武吉備津彦の後裔たちは、足守にこだわりがあり、本願地として大切にしている。そこに住んでいた海部とかかわりがないはずもない。しかも、本来海の民が当時、海岸線が今より近かったにしろ、海運業に不便な山奥をなぜ選ぶのか、おおいに疑問である。

実働部隊の^{かこ}水主らと支配層は役割分担していたのだろう。海の技術を持った^{かむはうり}神祝の命一族と吉備氏の娘との姻戚関係に発展し、系図の混乱が生じたのかもしれない。ここでは結論は出さないでおく。

◎大吉備津彦の子孫は肥後にいた

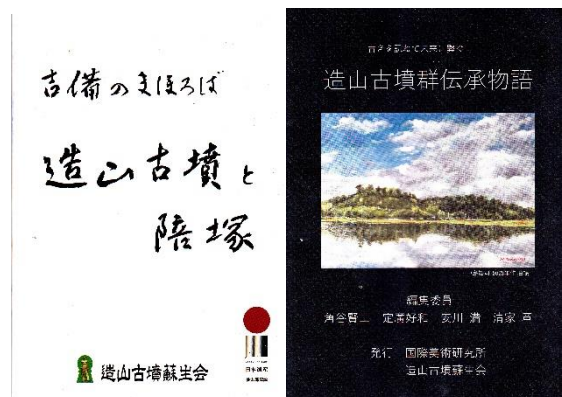
子孫がいないとされることの多い大吉備津彦命だが、先代旧事本紀の国造本紀によれば、その子・^{みついのねこ}三井根子命は、肥後の葦北の国造となっている。また、同書には志賀高穴穗朝の御代のこととして、「国前の国造、吉備臣と同じ先祖(第七代孝靈天皇の皇子大吉備津日子の命、若日子建吉備津日子の命)の六世の孫、^{うまさじ}午佐自の命を国造に定められた(国前国は豊後国国埼郡、今の大分県国東半島付近)。」と、さらに「天草の国造^{かむはうり}神祝の命(神魂の命)の十三世の孫、建嶋松の命を国造に定められた(天草国は肥後国天草郡、熊本県天草諸島付近)」という。神祝命一族は、^{おおく}応神朝の時、大伯の国造に七世の孫・^{さきすくね}佐紀足尼が吉備の大伯の国造に、^{きびなのかつあがた}崇神天皇の時、十世の孫明石彦を吉備中^{備中} (備中の後月郡と井原市の一部)の国造に定めたとある。吉備と肥後のかかわりの深さが見ていく。

次号からは、吉備東部の雄族の吉備海部一族と阿蘇凝灰岩の道でつながる肥後南部の葦北、臣一族・日羅親子の活躍と古墳群を通して、造山古墳の謎にさらに迫っていきたい。

<おわりに>

造山古墳群はこれまで、岡山大学考古学教室による測量が中心の調査が続き、岡山市埋蔵文化財センターも周辺の陪塚の発掘調査をしてきたが、平成28年から本体部分の発掘調査へ移行、昨年からは後円部の主体での確認発掘が始まった。

積極的な発掘に舵が切られたのは2009年の千足古墳の石障の直弧紋の剥離報告からで、復元され公開された千足古墳は、見学者にも配慮され、古代史に関心のある方々には良い刺激を与えている。地元の造山古墳蘇生会というボランティア団体が、過去の非正規な発掘で出土した遺物を岡山市埋蔵文化財センタ



一と協力し、収集保存に積極的に協力している。同時に古老の話など関係者の証言をまとめた「造山古墳伝承物語」=写真右=や「吉備のまほろば造山古墳と陪塚」=同左=を発行、前著にはインターネット上での関係者の証言がQRコードから、映像で視聴できるようになっており、積極的な情報発信がなされている。(了)

著者プロフィール：石合 六郎 (いしあい・ろくろう)



昭和 20 年 4 月、岡山県倉敷市児島に生まれる。立教大学文学部卒、昭和 44 年山陽新聞社入社、政治部、整理部、東京支社編集部などを経て、システム部署で新聞データベース構築に携わり、平成 17 年システム局次長で退職。同社嘱託を経て、川崎医科大学に勤務、同 19 年退職する。

東京支社時代、取材で同郷の安本美典氏と知り合い、邪馬台国九州説に共感、その後、九州の遺跡探訪中に福岡歴史研究会の大谷賢二理事長と知り合い、同研究会古代史講座を立ち上げ、講師も務める。同会の古代史イベントを担当、歴史ツアーなどを企画、運営。地元吉備にも興味を持ち、伝承を調査研究。現在、同研究会副理事長。現住所は岡山市中区。